

# 民俗資料と製作実習

後藤重巳

第二次大戦後の日本の特質を律する大きな出来ごとの一つとして、学制の改革の問題があげられよう。いわゆる六・三・三・四制の創設に対しては、結果として、今日指摘される若干の問題はあるにしても、教育制度の上に於ける未曾有の大改革であったことには異論はあるまい。

それに加えて更に、戦後社会史に、一大エポックを創出したのは、社会教育活動への志向の問題であった。

学校教育法と並立して、昭和24年には社会教育法が制定された。戦後いち早く（昭和21年）提唱された公民館活動と、この社会教育法とは互に補完し合い乍ら、やがては図書館法や博物館法との連携のもとに、各地に社会教育施設としての郷土歴史資料館の林立現象を見ることになった。今日では、やや俗語の部類に属するまでに至ったこの「〇〇立歴史資料館」の蒐集資料の中で、「考古学資料」及び「民俗資料」の量的に占める位置は極めて高い。その理由は、近時の急激な土地開発による考古資料の発掘・発見、生活様式の変化等による旧式生活用具の放出の度合が激げしくなっていることにある。特に民俗資料は、我々の生活体験として所在するために、やや郷愁的に評価され、博物館的施設に持ち込まれる傾向が強い。従って施設における民俗資料の扱いは、量的な面からの不消化もあって、展示面では、更に一考を必要とする現状にある。この不消化現象に消化剤を投与するのが、学芸員の責務である。

本講座における実習での最大の目的は、民俗資料を集め・単に展示するばかりではなく、それら諸資料が如何なる工程を経て製作され、目的に叶って機能するかを、学芸員として体得せしめることにより最も有効な展示工夫をさせることにある。

最高学府として位置する大学の講座において、草履を編み、竹割りを実習するという一見いかにも馬鹿げた作業を展開しなければならないことは或る意味では現代の悲劇である。しかしこのことは否定し難い現実であり、歴史のなせる要求でもある。学芸員なるものの要求される根本原理である。

さて、本年度の博物館実習では、昨年同様の竹材加工実習、ワラ材加工実習に加えて、木材加工実習を行なった。

竹材とワラ材の生活史上に占める意義と価値に関しては、すでに前号で述べた如く、それは生活の中の小製品から建築土木用材の分野に至るまで利用されて来た。しかし、戦後の合成樹脂化学の著しい発達によって多くの分野から、竹材・ワラ材を用いた製品が締め出され、これら製品は、まさに「博物館行き」の現況に至っている。

本年の実習でも、ワラ・竹材の生活史に占めた意義を力説し、それぞれの材質の特性を学ばせ、加工方法について実材を用いて実習した。

本年は、これに加えて木材加工の小実習を試みた。今日の生活様式の中で過去と大きな変質をもっている分野の一つに「履物」の問題がある。

そこでこの木材加工実習ではかつて生活に密接し

ていた「下駄」について主題をしぼった。

まず下駄について男物・女物の実物を示し、形状・名称等を教示した。そして例えば下駄緒の穴には、前穴・後穴の2種類のあることや、穴の方位についてなどまで観察させた。

製作実習に際しては、良好な桐・杉材が入手し難かった故に「トガ」材を用い、寸法は、全長15cmに縮小したミニ下駄作成を試みた。

実習に当って、特に留意した点は、全長中に占める「歯」の間隔及び、全長に対する前部と後部との比率に関してであった。下駄の使用に際して良否つまり「履き具合」は、ひとへに、この歯の位置によって決定する。そこで、市販の男物、女物の下駄数種によって、歯の位置等の平均値を計出し、実習用材の全長15cmの数値に比定することにした。製作時間は120分を費し、女子は2人1組で加工させた。

この実習では、学生は従前の竹材・ワラ材加工実習以上に興味を示し、実習成果は極めて大きかったものと評価している。

時間的制約から「鼻緒」の縫製までは及び得なかったが、これも市販の既製品を見本として示しその芯に用いる紐は、実物の麻紐を入手して実見させ、緒の作成はホーム・ワークとして指示した。

これら実習を通して感知した点は、現に生家が農業を営んでいる学生にあっても、道具の使用がいかにも不器用なことである。鋸・ノミを始め、工作用具の使用の様子を傍観していると、その使用のぎこちなさはとも角として道具の基本的な使用方法を知らない学生が多いことに驚かされた。

民俗資料は、人々の永い生活体験の中から必要によって製作されたものである。従って、それを創り出した技術や、それを支えた思考様式を度外

視しては、民俗資料を語り、扱う資格はない。そういう意味から有能な学芸員は、体験者であるべきであり、実習により製作された製品の出来具合の良否はやがて習熟度によって解決される。

見かけだけは、辛うじて下駄らしい作品乍ら、それを手にして悦ぶ実習生の実感こそが、やがて完べきな下駄作りへの原動力となるのではあるまいか。

いわゆる民衆の生活の内に用いられ続けた生活用具のすべてが、単に旅行者な・興味本意的な視点からばかりでは、気の付かない微細な個性を持っている。それは、体験者が、彼以外の者に、いかに絶妙な説明を与えても納得させることのできない特質であろう。民俗資料とは、まさにそのような、個性豊かなものなのである。先述した如く、民俗資料が、単に生活の体験から来る郷愁感によって蒐集され、展示されるならば、その施設や資料は街中の骨董品にしか値しない。

学芸員は、展示品の商品価値の鑑定者でなく、民衆史の証明者であり、証明のために観覧する人々のための、最善の補助・助言者でなければならぬ。この様な観点から、私は体験学習を力説したい。